

7. Moebius Syndrome の1症例

熱田藤雄, 松林みどり, 磯貝嘉伸,
今井 裕, 石山信之 (千大)

症例は7歳男児で, 反対咬合を主訴として来科。患者は, 神経内科より, 第Ⅲ, Ⅳ, Ⅵ, Ⅶ, Ⅻ, 脳神経支配領域異常の Moebius Syndrome と診断されている。頭部X線規格写真分析の結果, 反対咬合は歯性のもつと判断した。通常の矯正治療を行うとともに, Moebius Syndrome の経過を観察した。また Moebius Syndrome の原因, 反対咬合, 粘膜下口蓋裂と Moebius Syndrome に関して考察した。

8. Pierre-Robin 症候群患者の顎, 顔面発育について

高原利幸, 小原正紀, 高橋喜久雄, 甲原玄秋,
木村孝雪, 今井 裕, 今井香樹 (千大)

今回我々は, 過去15年間に当科を受診した Pierre-Robin 症候群患者のうち12歳の3例を対象に頭部X線規格写真の分析を行ない比較検討したところ Adolescent growth spat 以前では, 口蓋裂の手術による影響のみならず本症候群による固有の, 下顎成長が示唆されたので報告した。

9. X線テレビにおける健常者の鼻咽腔閉鎖像について

大木保秀, 尹 錫哲, 木村孝雪, 金沢美智子,
土屋晴仁, 石山信之 (千大)
額賀康之, 金沢正昭, 堀越達郎
(東日本学園大, 歯, 口外)

今回我々は従来からの資料に加えて, 健常者の咽頭部側貌X線透視所見について検討したので, その概要を報告する。

①軟口蓋最大挙上時の軟口蓋基底部分, 軟口蓋最上方点, 口蓋垂最下点でつくる角度は平均で102.5°であった。②軟口蓋最大挙上時の形態は, ㊶標準的なもの, ㊷上方に大きくもちあがるもの, ㊸後方に長くのびるものに分類された。③軟口蓋と咽頭後壁との接触部分は, 平均で軟口蓋鼻腔側の全長の26%であった。④軟口蓋の後方への移動量は平均で10.2mmであった。⑤構音時の軟口蓋の形態は, 通鼻音を除けば母音や子音の種類よりの違いは認められず, 音の高低, 強弱による違いも1例を除いて認められなかった。

10. Hydantoin 投与による実験的口唇裂の発生

木村孝雪 (千大)

妊娠10日前半の A/Jax マウスに, アレバアチンナトリウムを投与し, 口唇裂を発生せしめた。これらと正常 DDYF 胎児とを, 走査電顕で観察した。

1. His の癒合説とは異なって, 内外鼻突起後端と上顎突起の間には, 癒合によらない峽部が発生初期から存在する。

2. 口唇裂胎児では, 峽部は萎縮傾向となるがその形態は上顎突起と内側鼻突起で主に連絡し, 外側鼻突起は, 内側鼻突起基底部分から, 後外方に離れていく。

3. 以上から, 峽部の構成は内側鼻突起と上顎突起の結合の方が, 優勢であると思われる。

11. 4NQO 投与によるラット骨肉腫の発生実験

武藤寿孝 (千大)

4NQO を下顎骨, 大腿骨遠位端部に投与する骨肉腫発生実験を行なった。100g 前後のラットに4NQO を2m~4mg, 各骨髓内に投与した。発癌剤投与後4ヶ月までの骨の変化は, 破壊吸収と反応性骨増生が主で, 腫瘍性変化は見られなかった。発生腫瘍の頻度は下顎骨群が35例中1例, 大腿骨群が65例中32例であった。その組織像はほとんどが, 円形または紡錘形細胞の骨原性肉腫であった。転移は4例に認められ, いずれも肺であった。

12. 口底部に生じた腺様嚢胞癌の1症例

大塚晴久, 榎本武司, 大塔雄二, 松浦孝志,
見崎 徹, 堀 稔, 田中 博, 工藤逸郎
(日大・歯・口外)
斉藤一郎, 小宮山一雄 (日大・歯・病理)

48歳女性左側口底部に生じた唾液腺由来の腺様嚢胞癌の1例を報告し, 病理組織学的免疫組織学的には CEA ならびに各種分泌性蛋白の局在について検討した。

13. 頬部に初発症状を呈した直腸癌の1例

北村完二, 谷内正喜, 原田江里子, 原田尚也,
額賀康之, 村瀬博文, 金沢 正昭, 堀越達郎
(東日本学園大・歯・口外)

症例は, 76歳の女性で中心部に膿瘍形成をみる右頬部の腫瘍で, 生検では CEA の局在を認める乳頭状腺癌の像であった。その後の精査により直腸原発癌の右頬部および広範な骨転移が疑われ, 直腸切除標本よりこれが